

「言葉は力なり」の解釈

—言語行為の力とその他の力—

● 村 越 行 雄

1. はじめに

言葉に関する意識は、古代から現在に至るまで、様々な形で現れてきている。言葉をどのように認識するのかによって、当然のことであるが、意識の相違が生まれてくる。そして、意識の相違が言葉の使用にも、さらには生活全般にも影響を与える。そのような言葉の意識を探る為に、「言葉は力なり」という表現を取り上げ、言葉が持つ意味や役割を少し掘り下げていくことにする。

2. 「言葉は力なり」に関する様々な解釈の可能性

よく目にしたり、耳にする「言葉は力なり」という表現は、一見すると、一義的に見えるが、考えてみると、多義的であることがすぐに理解できる。例えば、英訳をしようとするとき、まず「言葉」は、どのように翻訳されるのであろうか？語の集まりとして、words が適切なのか、それとも1つの体系的なシステムとして、language が適切なのか？言い換えれば、日常的に接している語の組み合わせに力を認識するのか、それとも日本語や英語のように、1つの言語として力を認識するのか？両者の認識の相違は、かなりの隔たりがある。日々接している語の組み合わせは、その背後にある文法などの構造的なシステムを必ずしも意識しているわけではなく、具体的で、個別的な使用方法に認識の対象が向けられる。それに対して、1つの言語として捉える場合、構造的システムの総体（統語論的な総体）あるいは文化・民族・国家を1つにまとめる総体（文化的・民族的・国家的な総体）が認識の対象になる。つまり、個別的使用のレベルと統語論的あるいは文化的・民族的・国家的総体のレベルの相違が存在する。

次に、「力」は、どのように翻訳されるのであろうか？多種多様な力を包括するような力として、power が適切なのか、物理的な力として、force が適切なのか、元気の源として、energy が適切なのか、強さの表れとして、strength が適切なのか、それともそれ以外のものなのか、解釈は多様化していく。逆に言えば、「力」という言葉は、かなり曖昧な形で使用されており、むしろその曖昧さを意図的に求めた結果として、日本語表現が曖昧なままに残されているのであって、それを英語に翻訳する場合には、日本語の「力」に相当する英語の語彙が多いだけに、的を絞る特定化・限定化の作業が困難になる。日本語の「力」には、曖昧さという欠点ではなく、多種多様な力を内包させることで生まれる利点が暗に込められているのであろう。その意味では、「力」を無理に限定的に使用することは、逆効果をもたらすことになり、従ってあえて曖昧さを残しつつ、しかも全ての力を内包させる目的で、power を使用することが適切なかもしれない。

さらに、「言葉」と「力」の関係は、どのように翻訳されるのであろうか？言葉がそれ自体で力であるとすれば、言葉＝力として、words are powers となるであろうし、言葉が力をそれ自体ではなく、むしろ所有する関係であるとすれば、言葉≠力として、words have powers となるであろうし、言葉と力が別のものであるとする点では、同じであるが、所有関係ではなく、同時発生的な関係であるとすれば、言葉≠力としては同じであるが、words work with powers となるで

あろう。簡単に言えば、言葉＝力と言葉≠力に大別できることになる。勿論、関係そのものを考えれば、否定的な関係も関係の一種であると捉えられるので、「言葉には力がない」、「言葉は力を減じる」、「言葉は力を逆転する」なども、言葉と力の関係の1つの選択肢としては可能である。実社会では、事実、言葉の力を信じない人は多くいるし、言葉を使用することで、効果を減少させることもあるし、かえって反感を買って、逆効果になることもある。もしそれらを含めるとしても、言葉＝力、言葉≠力、言葉＝0の3つの区別で収まるであろう。言葉には力があるかどうかでまず区別でき、その上で、力があるとする場合に、両者が同一なのか、別物なのかで区別できるからである。そして、力は元々肯定的側面と否定的側面の両側面を持っているのであって、ある時にはプラスに働き、ある時にはマイナスに働くとすれば、あえてそこを区別する必要はない。むしろ、状況などによって、プラスにも、マイナスにも働くのが力であると言える。

3. 「言葉」と「力」の考察

「言葉」に関しては、上記のように、語の段階と文の段階で区別したが、日常生活において、言葉が実際に使用される場合、表現手段としての言葉、そして伝達手段としての言葉は、実際に使用されることで、意味が意識の対象になると考えれば、発話 (utterance) が表現・伝達における意味の最小単位ということになり、従って考察の対象も発話となる。勿論、意味をどのように捉えるのかは、様々な議論が行われており、使用される以前に、言葉はすでに意味を有していると捉えるのか、それとも使用することで、初めて意味を有することができるかと捉えるのか、あるいは別の捉え方をするのか、議論になるところであるが、ここではその問題は取り上げないことにする。

発話については、厳密に言えば、文の実際の使用が発話であり、単なる語としては表現・伝達における意味の最小単位になることはできないが、実際問題としては、1つの語であっても、1語文という形で処理されるし、句も同様に文として処理されるので、そのことは考慮しないで、語の発話、そして句の発話も、文の発話と同様に扱い、単純に発話とすることにする。発話という言葉の実際の使用場面では、単一の語であっても、句であっても、文であっても、語の組み合わせとして人々には映るのであり、語の持つ意味が重視され、どのような語が使用され、どのような組み合わせで使用されるのかが対象にされる。その意味では、言葉の表面的な現れが対象になり、そこに何らかの力を感じ取ることになる。例えば、有名人の格言・名言のように、個人の人生によって裏打ちされた言葉に力を感じ、語の操りの巧さに感心するのであり、たとえ1つ1つの語はごくありふれたものであっても、人生における実体験に基づく、語の巧みな操りによって力が発揮される。「言葉は力なり」もそうであって、語自体はごく単純で、誰もが思いつくし、言える言葉であるが、それだけでは人々は力を感じないでしょう。有名人が言って、初めて力が言葉から発せられるのであり、従って言葉の表面的な現れと言葉使用者の実体験に基づくものとなる。勿論、言葉使用者については、誰でもいいわけではなく、経営者、官僚、政治家、マスコミ関係者、学識経験者、歌・映画・テレビ・スポーツなどのスターなど、ある一定の社会的地位・社会的評価を得ている人たちであることが必要となるが、それ以外にも対象者はおり、例えば、小さな集団などでは、人気のある人、信頼のある人、発言力のある人、愛する人、好きな人、親しい人、頼りにしている人など、必ずしも社会的地位・社会的評価がなくても、小さな集団という仲間内では、別の要素が関係してくる。さらに、勿論、実体験についても、上記の人たちであれば、実際に体験したことだけでなく、見たり、聞いたり、読んだりして、得られる知識や情報によって発話される言葉も、力が発揮される可能性がある。

言葉と力について、言葉の表面的な現れと言葉使用者の状況の関係から見てきたが、それとは対極をなすものに、言葉の深層的な構造がある。つまり、言葉の外面的で、表面的な現れのように、人々の五感を通して知覚されるものではなく、五感によっては直接知覚できない、言葉の中に（裏に）隠され、潜んでいるものがあり、表面的にはバラバラに見えるものが、その裏では、組織的につながりのある、システム化された構造が存在するということである。そこでは、単なる語の組み合わせではなく、その元になっている文法的な組み合わせがあり、統語論的なシステム構造が存在することになる。そのような深層的な構造の存在は、言葉の中に（裏に）隠されているだけに、言葉自体が何らかの力を発揮しているように思えてくる。例えば、Bring me the book!（「その本を持って来て！」）という命令文の文法構造を知れば、「本」という語を別の語に入れ替えることで、多くの表現が可能になり、極端な言い方をすれば、文法構造を知ること、無限の表現を作ることができ、言語コミュニケーションの円滑化と発展を実現できることなるのであって、まさに深層的な構造から力が発揮され、人々が直接見ることのできる表面的な言葉の現れから力が発揮されているように感じる。簡単に言えば、言葉自体から力が発揮されると感じる。

以上、2つの可能性を記述したが、勿論これで全てが網羅されたわけではない。あくまでも、いくつもある解釈の可能性の内、代表的と思われるものを2つだけ選んだにすぎない。それはともかくとして、言葉の捉え方が異なれば、力の出所も異なるということである。言葉の外面的で、表面的な現れだけに目を向ければ、言葉使用者の状況による裏付けによって力が付加され、外部からの注入によって力が言葉に入り込むような感じになる。それに対して、言葉の内的で、深層的な構造に目を向ければ、言葉の内部に潜む統語論的な構造から力が生まれ、それが言葉を通して表面化し、あたかも言葉自体が力であるかのような感じになる。

しかし、2つの可能性をよく見れば、力の種類が異なることに気がつく。前者が言葉の使用力であり、後者が言葉の能力になる。厳密に言えば、語の集まりと1つの総体としての言語の区別に基づけば、前者が言葉使用力（「言葉」は、限定的に、語を意味するものとして使われることがあるので）で、後者が言語能力になる。従って、言葉の捉え方の相違によって、力の出所だけでなく、力自体の特性も異なってくる。

4. 「言葉」と「力」の関係の考察、特に言葉＝力について

言葉の捉え方が異なれば、力自体の特性も、力の出所も異なることを考察してきたが、言葉の深層的な構造の方が、言葉＝力を表すものであり、言葉の表面的な現れの方が、言語≠力を表すものである。では、言葉と力の関係は、どうなるのであろうか？上記のものは、言葉＝力と言葉≠力のそれぞれの1例にすぎないからである。

言葉＝力の方から、始めることにする。言葉がそれ自体で力であるという関係は、言葉と力が同一のものであるとか、あるいは言葉が力の源であるとか、いずれに解釈するにしても、本来的には、外部の、他のものに依存しないことを意味し、非他者依存性を特徴とする。なお、同一と源は、厳密には異なる意味合いがあるが、ここでは問題を複雑化させない意味で、同様なものとして扱っていく。

言葉＝力の特徴を非他者依存性であるとしたが、100%外部のもの、他のものに依存しないとは言えない。言葉が力の出所であるとしても、さらにその前の出所はないのかという問題、また力の出所が言葉であっても、他者に全く関係なく力が発揮されるのかという問題などがまず考えられる。それらの点を踏まえながら、考察を行っていく。

1 番目の言葉＝力の例として、神秘的力、宗教的力、超自然的力などがある。古代から、人々は人間の能力を超越したものを信じてきたし、宗教的力、超自然的力などのような人間と自然を超越した力だけでなく、自然力のような人間を超越した力も信じてきた。なお、神秘的力は、自然を超越したところでも、また自然そのものにも信じられていたので、両方に属する。いずれにせよ、人間や自然を超えた超越的力を信じてきた。そして、言葉についても、現代のように、単なるコミュニケーションの手段という位置づけではなく、言葉そのものが超越的力であると信じ、言葉への敬いも遙かに大きいものであった。それは、日本における言霊思想に見られるし、また世界的にも、各地域に同様の思想が存在していた。古代から、中世、近代にかけて、自然界における自然崇拜であったり、宗教における信仰であったり、論理や理性などの観念であったり、超越的力を信じる傾向は長く続き、質的にも、量的にも、変化しながら、現在でも継続している。言葉をそれ自体で超越的力であるとする解釈は、神、ロゴスと同様に、言葉を位置づけることで可能となるが、決して他者依存性を完全否定したところにあるわけではなく、何らかの形で他者（神、ロゴスなど）からの力の注入があったはずであり、ただ人間にとっては、五感と通しても直接知覚できないし、理解するのも人間の能力を超えていたところにある為、力の出所が言葉自体にあり、言葉がそれ自体で力であるように感じた。たとえ力の最初の出所が別のところにあるとしても、人々にとっては、言葉自体に力の出所があると思い、言葉の超越的力を信じ、使用していることは事実である。現在でも、宗教を信仰する人々だけでなく、それ以外の人々も言葉の超越的力を信じている事例は多く見かける^(註1)。

2 番目の言葉＝力の例として、前掲の言葉の深層的な統語論的構造を取り上げる。1 番目の例は、古代から続く古いものであるが、2 番目の例は、言語学などによる言葉の分析が進展していった結果であり、現代的なものである。特に、多くの注目を浴びているチョムキー（Chomsky）の言語学がその代表的な例である^(註2)。言葉は、誕生後に、白紙に書かれて、満たされるように^(註3)、経験を通して得られる後天的なものではなく、その能力を先天的にすでに持って生まれてくるものである。つまり、誕生の後から、外部から五感による経験を通して得られる言葉だけで、言葉の使用が可能になるのではなく、すでに内部に能力として備わって誕生するのであり、その後、経験を通して得られる言葉が付加されることで、言葉の使用が可能となる。それは、人々が日常的に文法的に正しく言葉を使用していることへの説明であり、誕生後の経験のみによる説明への反論である。そして、それは、言葉の背後に隠された深層的な先天的な能力（普遍文法）の存在を示すものであり、表層的な言葉の使用だけでは不十分であることを明らかにするものである。ともかく、誕生時にすでに備わっている言葉の能力は、内部に潜む力として初めから存在し、そして誕生後の経験から、例えば、日本で生活していれば、日本語という言葉を取り入れて、潜在的な力が現実化して、個別文法である日本語文法に一致する形で、文法的に正しい言葉を使用できるようになり、またアメリカで生活していれば、英語という言葉を取り入れて、個別文法である英語文法に一致する形で、文法的に正しい言葉を使用できるようになる。

言葉は、それ自体として、その内部に力を備えることで、文法的に正しい表現ができるわけで、もしその力の存在を認めなければ、文法的に正しい言葉の使用は説明不可能になる。五感を通して直接知覚できないし、経験によって証明もできないが、もし表層的で、表面的な現象だけを見て、それだけで説明し、証明しようとしても、結局人々が文法的に正しく表現できることの理由が証明できず、むしろその内部に、深層的で、潜在的な力の存在を想定することで初めて説明可能になり、証明できることになるという論法である。ここでは、力は言葉の内部に備わるものとして位置づけられるが、その出所は人間自身が持っている言葉に関する能力にあり、現代的な言

い方をすれば、DNAによって遺伝的に継承される言葉の能力にあり、またその潜在的な力は誕生後の経験を通して得られる各言語の個別文法として実現化することになり、力の出所は二重に他者依存的となる。力の出所は、まず言葉にあり、その前に人間にあることになり、また力の発揮は、それ自体だけでなく、各個別言語を通してとなる。その意味では、力の出所が言葉であっても、100%非他者依存性ではなく、かなり他者依存的なものの例となる。

3番目の言葉＝力の例としては、フンボルトなどの言語論がある^(註4)。1番目の超越的力、2番目の言語力(単なる語の集まりではなく、1つの体系的なシステムとして言語の力)に続いて、民族力と言えるようなものである。2番目と同様に、1つの体系的なシステムとしての言語に関するものになるが、統語論的な構造ではなく、民族の究極的で、集大成的な現れとしての言語に関するものとなる。言語(つまり、民族語)は、民族の現れであり、それ自体として民族を表すものであって、そこに言語がそれ自体で力であることの土台がある。従って、欧米の英語、ドイツ語、フランス語のようなヨーロッパ語は、完全な言語であり、それはまた、欧米民族の優位性を示すもので、その反対に、不完全で、未発達な言語は、劣位性を示すことになり、結局完全な言語を習得することで、劣位の民族は改善され、より向上されるという考えに辿り着いてしまう。そこでは、全ての言語が対象なのではなく、ある特定の言語、つまり優位性を有するとされるヨーロッパ語がそれ自体で力であるということになるが、逆に、劣位性を有するとされる言語はそれ自体で力であることはできず、あくまでも優位性のある言語を習得することで、初めて力になる。勿論、その背後には民族の優位性と劣位性という差別が存在しており、言語＝力→言語＝民族→言語＝民族力という構図が見えてくる。その評価は別にして、少なくとも特定の言語、特定の民族にとっては、言語はそれ自体で力であると見なされる。

それとの関連で、サピア＝ウルフの仮説^(註5)、あるいは言語相対論が4番目の例としてある。言語は、人間の認識、思考などの意識に影響あるいは規定するのであって、逆の意識が言語に影響あるいは規定するという一般的な考えを否定する。なお、影響は弱い関係であり、規定は強い関係となる。言語が自立した力として位置づけられ、人間の認識や思考だけでなく、判断や行動までも影響あるいは規定するとする点で、単なる手段として意識が言語をコントロールするのではないことが示される。それは、言語がそれ自体で力であるということの表れである。その場合の力は、人間の意識を何らかの形でコントロールするという意味で、意識影響・規定力と特徴づけられる。

以上、言葉＝力の例として、4つだけ挙げた。それらの力は、超越的力、言語力、民族力、意識影響・規定力という形で、特徴づけてきたが、人間や自然を超越したもので、私たちにはどうすることもできない力であったり、経験によって後天的に得られるのではなく、生得的に、先天的にすでに備わっているものとして、誕生後の私たちにとっては何もできない力であったり、個々人という個別レベルではなく、民族という1つの集合体として、結束力が極めて強く、密接不可分なものとして、個人ではどうすることもできない力であったり、人間の意識過程・意識構造という人間そのものを意味するものとして、私たちに何もできず、ただ受け入れるしかない力であったりする。個別的には異なるものであるが、共通する点としては、100%非他者依存性というわけではなく、言葉と力の関係の背後には、その出所がどこからであれ、何か隠されたもの、何か潜んでいるものが存在するが、私たち人間にははっきりと見えず、たとえその存在を感じながらも、言葉がそれ自体で力であると思えるし、そのようなものとして捉えている。そして、そのように捉えているからこそ、まさに言語＝力となる。

5. 「言葉」と「力」の関係の考察、特に言葉≠力について

言葉＝力では、両者が一体化され、強く、時には絶対的な力であり、少なくとも個別レベルでは、人間の限界を超えたところにあった。しかし、言葉≠力では、元々言葉と力は、別のもので、異質なものとしてあり、それらの個別的で、異質な2つものを何らかの理由で結びつけることになる。当然のことであるが、言葉に力を結びつけてもいいし、結びつけなくても構わないし、どのように結びつけて、どのように結びつけなくても、様々な選択肢が存在する。そして、結びつけるのは、個別レベルでの人間（個人であっても、集団・組織であっても構わず、あくまでも個別レベルで人間を捉えるにすぎない）が中心になる。

そこで、言葉≠力については、2つに区別して考えることができる。1つは、言葉が何らかの力を持つという所有の関係であり、もう1つは、言葉と力が絶えず同時に発生するという同時併発の関係である。

まず、所有性から始める。元々異質な2つものが所有関係に入る為には、何らかの操作によって、一方が他方を所有する関係を作らざるを得ない。勿論、言葉が力を有するとする場合、言葉を使用する人間がその操作を実行する主体となる。個人による操作であれば、前述の有名人の格言・名言があるし、集団・組織による操作であれば、憲法から刑法、商法、民法までの、国が定めた様々な法律があり、またその他の集団・組織が定めた法律などがあるが、共通項としては、公の法的拘束力という性質を有する。

有名人の格言・名言については、言葉が力を有する所有性、言い換えれば、言葉に力を付け加える付与性が基本的な性質なので、有名人に限定する必要はなく、言葉に力が付与されて、人々が言葉に力を感じ取ればいいわけで、その範囲は当然広がっていく。別の言い方をすれば、言葉はそれ自体では何の力にもならず、また何の力も有することができず、力を付与するのは人間であり、従って何らかの条件を満たせば、誰であっても可能になる。その条件の1つが、社会的地位や社会的評価となる。その他にも、前述のように、小さな集団・組織という人々の集まりの中では、リーダーという地位にいらなくても、言葉に力を付与することができ、そこでは信頼性が条件になる。さらに、言葉を使用する側の発信者だけでなく、受信者側の認識によることもある。例えば、受信者が困難な状況に置かれ、助けを求めている時（自殺など）、何気なく言われた言葉、何気なく見た言葉に強い力を感じ、そのことで苦境から脱出できるケースもある。

言葉への力の付与性が、発信者側の多様性を可能にし、また受信者側の多様性も可能にしているのは、言葉がそれ自体では力にはなりえず、また力を有することもできないことの現れであり、それだけに力を付与する人（力を付与する発信者側だけでなく、発信者は意識しなくても、受信者側が付与されたと感じるケースも含める）の重要度が増加することになる。その意味で言えば、有名人だけでなく、また格言・名言だけでなく、日常的な場面でのありふれた言葉にも力を有する可能性は十分あることになる。

次に、国家、その他の公的な集団・組織が定める力の付与性が法的拘束力である。個人による付与性とは異なり、厳密性が強く求められ、条文の解釈などで論争を招くほどである。それだけに、力の拘束力が巨大であることを意味する。例えば、裁判所での罪の確定過程、刑期の確定過程などは、法律の条文の解釈の難しさを示すものであり、言葉が有する力の大きさの意味を表すものである。勿論、所詮人間が操作して、人間が定めた力であり、従って人間の限界そのものを表しているということもできる。逆に言えば、人間の操作によって定められた力であるからこそ、人間にとっての重要性を表すものであるとも言える。ともかく、法的拘束力の場合、言葉が力を有する関係において、言葉をどのように厳密に解釈するのかによって、具体的にどのような力に

なるのかを規定するし、そのことで個人の生活も規定することになる。それだけに、言葉の厳密な解釈が重視され、従って条文などを作成する時に、言葉の厳密な表現が求められる。まさに、言葉によって私たちの生活を規定する力である。

言葉≠力の中の付与性（所有性）について、個人による付与性としての生活力と公的な集団・組織による付与性としての法的拘束力の2つのタイプを見てきたが、その他の可能性を否定するものでは決していない。なお、前者を生活力としたのは、誰が言った言葉であれ、何を言った言葉であれ、日常生活における庶民にとっては、生活する上での力になるからであり、比喩的には、生活の糧となるような力になるからである。

言葉≠力の中の同時併発性を見ていく。言葉と力が2つの異質的で、異なるものであるという点では、付与性と一致するが、言葉が力を有する所有関係もなく、言葉に力を付け加える付与関係もなく、2つのものが絶えず、同時に発生するが、決して2つが直接結びつくことはなく、ただ併存しながら、同時に発生するにすぎない。その典型的な例は、言語行為理論であるが、それに近いものとして使用理論がある^(註6)。両者には、類似性もあるが、相違もあり、ここでは使用理論を取り上げて、言語行為理論は次のところで検討する。

現代哲学の中心的存在であるウィトゲンスタインの哲学の内、後期の哲学の中で、意味＝使用という考えが記述され、それを使用理論と呼ぶのが一般的になっている。ただし、彼自身が1つの理論として使用理論を展開しているわけではない。また、彼は言葉を多くの場合 words として使用しており、従って言葉は語の集まりとして捉えられていると言える。ともかく、言葉は、それ自体で最初から意味を有しているのではなく、実際に語が使用されて初めて意味が発生し、意味を有することができることになる。そして、彼にとっての意味は、辞書を引いて出てくるような言語的意味（語義）というような限定的なものではなく、より広い生活圏という意味合いで使用されている。従って、意味＝力と捉えるならば、言葉は最初からそれ自体で力を有しているのではなく、実際の使用によって初めて力が発生し、力を有することができることになる。つまり、言葉が使用されて初めて力が発生するという意味では、同時発生性という性質を有する。しかし、同時発生した力を言葉が有するとすると、そこには所有性という性質が出てくる。ただし、所有性と言っても、元々ある言葉に後から力を付け加えるような付与性はなく、従って力を付与することで、その結果として力を有するような付与性の結果としての所有性ではなく、言葉と力が同時に発生する（実際に使用される）ことで、その結果として力を有することになり、同時発生性の結果としての所有性となる。そして、その際の力は、使用力ということになる。

以上のように、言葉≠力について、付与性（付与性の結果としての所有性）の例として、生活力と法的拘束力を挙げ、同時発生性（同時発生性の結果としての所有性）の例として、使用力を挙げた。なお、後者は、同時発生性の結果としての所有性という意味での同時発生性であって、所有性を否定する、同時発生性の結果としての併存性という意味での同時併発性とは区別できるものであるが、その類似性も重要な意味があり、それを考えれば、同時発生性という1つの範疇に入れて、その中で所有性と併存性を区別して、同時発生性の結果として、その後の処理の仕方の違いを示すことも1つの方法である。

6. 言語行為理論について

言葉＝力における一体性の例として、超越的力、言語力、民族力、意識影響・規定力の4つを挙げ、言葉≠力における別物性（相違性）の例として、付与性（所有性）の生活力と法的拘束力、同時発生性（所有性）の使用力の3つを挙げてきた。最後に残ったのが、同時発生性（併存性）、

つまり同時併発性のケースである。そして、同時併発性の典型的な例である言語行為理論^(註7)では、力には「発語内的力」(illocutionary force)が使用され、まさに物理的な力を示す force が使用されており、今までの力とは大きく異なるものである。つまり、多くの場合、力は power として使用されているからである。

言語哲学においても、また語用論においても、中心的な位置を占めるのが言語行為理論である。オースティンによって提唱され、確立された理論であり、サールがその後を引き継いで、発展させた理論である。オースティンも、主著の題名を How to do things with words としていることから理解できるように、言葉を words として使用し、語の集まりとして捉えている。ウィトゲンスタインと同様に、言葉の背後に潜む統語論的なシステム構造ではなく、実際の場面での使用の方に重心を置いているからであり、従って文法的に正しい文ではなく、発話場面(使用場面)という状況に適切な発話が分析対象になる。

言葉(speech、言葉の発話として speech が使用されるが、実際には話し言葉だけでなく、書き言葉にも適用され、従って speech を「言語」と訳するのが一般的である)と行為(act)は、基本的には異なる異質のものであって、両者が結びつくことはあり得なかったが、その2つを結びつけて、言語行為(speech act)としたのがオースティンである。そして、言葉は意味に関係するものであるが、行為は力に関係するものである。従って、言葉と行為の異質のものとの関係は、意味と力の関係に反映される。ここでは、ウィトゲンスタインとの相違が出ており、意味を言語的意味として捉え、意味=力とはならない。意味と力は、全くの別物で、意味が力を有することもできなければ、意味に力を付与することもできないのであって、あくまでも同時に発生し、そのまま別のものとして併存することになり、それが両者の結びつきのことになる。

両者の結びつきを示す為に、例を挙げる。例えば、ある人が約束すると言う(発語行為)時、単に口から言葉を発しているだけでなく、同時に約束という行為を行っている(発語内行為)のであり、2つは必ず同時に発生するのであり、従って約束を破った場合、約束という言葉をただ言っただけであるとは言い訳できず、ただ言っただけで、すでに約束という行為を行った以上、約束を破れば、非難されたり、罰を受けるかもしれない。そして、約束が力(発語内的力)になる。つまり、力とは、物理的なものであり、語を発すると同時に発生する行為であり、約束、警告、謝罪など、多種多様に見られる実際の、個別的で、具体的な力であり、実際の発話の中で行う実行力であり、意味が所有できたり、意味に付与できるようなものではなく、独立した存在である行為の力であるという具合になる。

ここで重要となるのが、言葉と力の関係を一体化したり、所有関係にしたり、付与関係にしたりしないことである。あくまでも言葉と力を別物とすることで、ただし全く無関係ではないので、同時発生性+併存性という同時併発性という形で、別物であることと関係あることを共に維持することで、実際の会話の場面が見てくる。つまり、言葉による表現は、固定的で、一定しているわけではなく(統語論的に捉えれば、固定的で、一定している)、状況によって異なる捉え方ができるのであって、言い換えれば、異なる力になる。例えば、友人に向けて「明日、必ず行くよ。」と言う場合(間接的言語行為のケース)、単に明日の行動を述べる叙述という行為であったり、明日行くことを約束する約束という行為であったり、何か問題があって、注意しに行く警告という行為であったり、相手を押さえつける脅しという行為であったり、その他にも、様々な行為になりうるのである。同一の言葉の表現が、異なる、複数の行為として行われ、また力として発揮される一方で、逆に、同一の行為そして力が、異なる、複数の言葉の表現になりうるようになる。そのようなことによって、実際の会話の状況が明確になり、理論化が可能になり、それを

実現したのである。

同時併発性の重要性は、言葉をコミュニケーションの手段として捉え、その言葉によって伝達し、コミュニケーション関係を円滑化し、それによって人間関係を維持・発展させる為には、言葉自体が力であったり、力を所有したり、力を付与されたりすることで、言葉に必要以上の重荷を負わせることで、コミュニケーション手段としての機能を低下させるのではなく、むしろ言葉を他のものから全て引き離すことで、その機能を向上させ、本来の姿である人間がより前面に出るようにさせることにある。

7. 最後に

「言葉は力なり」という表現が意味するものを考察してきた。そこには、言葉と力の一体性と別物性（相違性）の区別があり、後者には、付与性（所有性）と同時発生性の区別があり、さらに後者には、同時発生性（所有性）と同時併発性（同時発生性＋併存性）の区別があった。そして、力としては、超越的力、言語力、民族力、意識影響・規定力、生活力、法的拘束力、使用力、発語内的力があった。その多様な分類の意味は、単に表現の曖昧性に原因があるとしただけでは、明確にはならない。実社会で、言葉が果たす役割がいかに大きく、いかに広範囲に広がっているのかを示すものと捉えるべきであろう。簡単な言い方をすれば、積極的に捉えるべきである。

注：

本文中の内容に関連する考えについて、代表的なものを示すことにする。なお、詳しい記述は省略し、簡単な言及のみで済みます。

(1) 日本の言霊思想、キリスト教の聖書、イスラム教のコーランなど宗教関係の教典・経典など、(2) アメリカ言語学者チョムキーの生成文法論を初めとする生得的な言語学など、(3) 生得論に対立する、イギリス哲学者ジョン・ロックなどの経験論、(4) ドイツ言語学者フンボルトの言語論などの民族言語論、(5) サピアの文化人類学とウルフの文化人類学、(6) オーストリア出身の哲学者ウィトゲンスタインの言語哲学、意味に関して、前期の指示理論から後期の使用理論へと変更、(7) イギリス哲学者オースティンの言語行為理論とアメリカ哲学者サールの言語行為理論

参考の為に、上記の研究者の主要な著作を挙げることにする。なお、日本語訳になっている著書のみを記することにします。

チョムスキー (Avram Noam Chomsky) : 『文法理論の諸相』研究社出版 (安井稔訳)、『デカルト派言語学』みすず書房 (川本茂雄訳)

ロック (John Locke) : 『人間知性論』全4巻、岩波書店 (大槻晴彦訳)、『市民政府論』岩波文庫 (鶴飼信成訳)

フンボルト (Friedrich Wilhelm Christian Karl Ferdinand Freiherr von Humboldt) : 『言語と人間』ゆまに書房 (岡田隆平訳)、『言語と精神』法政大学出版局 (亀山健吉訳)

サピア=ウルフの仮説・サピア (Edward Sapir) とウォーフ (Benjamin Lee Whorf) : ウォーフ著『言語・思考・現実』講談社 (池上嘉彦訳)、サピア、ウォーフ著『文化人類学と言語学』弘文堂 (池上嘉彦訳)

ウィトゲンスタイン (Ludwig Josef Johann Wittgenstein) : 『ウィトゲンスタイン全集』全10巻、補巻2、大修館書店

前期の主著である『論理哲学論考』は第1巻 (奥雅博訳) に、後期の主張である『哲学探究』は第8巻 (藤本隆志訳) に収録されている。なお、それ以外にも、多くの翻訳書がある。

オースティン (John Langshaw Austin) : 『言語と行為』大修館書店 (坂本百大訳)、『オースティン哲学論文集』勁草書房 (坂本百大訳)、『知覚の言語』勁草書房 (丹治信春・守屋唱進訳)

サール (John Rogers Searle) : 『言語行為』勁草書房 (坂本百大・土屋俊訳)、『表現と意味』誠信書房 (山田友幸訳)、『志向性』誠信書房 (坂本百大訳)

なお、文中で言及した間接的言語行為は、グライスの含意と密接な関係にあるので、それも付け加えておく。

グライス (Herbert Paul Grice) : 『論理と会話』勁草書房 (清塚邦彦訳)

また、後期ウィトゲンスタイン、オースティン、サール、グライスなどは、分析哲学の中心的哲学者であり、日常言語学派とも言われているので、分析哲学、日常言語学派、オックスフォード学派などで調べれば、全体的な流れがより明らかになる。